

発行日：2月13日

日本は人類共同体思想で移民国家の頂点を目指す

著者：坂中英徳

ミスターイミグレーションが世界に乗り出す

白人至上主義者と言われているトランプ米大統領の登場で、「アメリカは人種のるつぼ」という移民国家の神話が崩れ、日本の人類共同体思想に世界の注目が集まっている。

私は人口崩壊の危機が迫る日本を救いたい一心で、1000万人の移民を、50年計画で秩序正しく入れる日本型移民国家の設計図を描いた。これほど野心的な国家ビジョンは世界にもあまり例がないのかもしれない。

ところで、2016年に入り、世界の移民大国が一斉に移民の入国規制に舵を切った。世界文明をリードしてきたイギリス、フランス、アメリカ、ドイツで異なる民族と宗教に対する寛容の精神が影を潜めた。移民問題を主たる理由とする英国の欧州連合（EU）からの離脱や、トランプ米大統領の移民に対する常軌を逸した強硬姿勢が物語るとおりである。

移民憎悪者や排他主義者たちが世界にはびこるのを許してはならないと考える日本のミスターイミグレーションが世界に乗り出す。グローバリズムの終焉という西欧文明の末期症状を見ることになるとは夢にも思わなかったが、日本文明の所産である日本型移民政策の旗を高くかけ、西欧諸国に移民政策の軌道修正を迫る。

しかし、移民鎖国を続ける日本には、トランプ米大統領の暴走に苦言を呈する資格はない。それどころか、日本はトランプ大統領のアメリカと同じ移民排斥の国と世界から見られる恐れがある。また、剛腕のトランプ米大統領が、移民鎖国を続ける日本に対し、移民開放政策を要求してくる可能性がある。日本に移民開国を迫る「第二の黒船」である。

そこで政府にお願いがある。トランプ氏の先手を打って、「経済大国で移民受け入れ能力が十分ある日本が、50年間で1000万人の移民を計画的に入れる用意がある」と、世界に宣言していただきたい。

移民恐怖症が世界中に蔓延する恐れすらある今日、日本の移民政策は日本の人口危機を救うだけでなく、世界の人道危機を救うものに飛躍発展する。それを実行に移せば、日本が世界的な移民・難民危機を救ったとして、国際連合を始め世界の人々から感謝されるだろう。

私は、世界的使命が日本人に託されるのは天の配剤と受け止め、人類共同体の理念を世界の人々に訴え続ける決意である。

人類愛で世界のトップを目ざす

空前の規模で移民を入れても人口の激減がさげられない50年後の日本はどこに向かっているのだろうか。人口減少期を生き抜くために私たちは何を国是と定めればいいのか。

今と同じ世界有数の経済大国や軍事大国の地位が望むべくもないことは明らかだ。そんな旧態依然の国家目標に代えて、移民大国にふさわしい新国家理念を提案したい。

移民国家・日本は人類愛で世界のトップを目ざしてはどうか。世界に先駆け、9000万人の日本人と1000万人の移民が協力し、1億の国民の心がとけあって一つになる人類共同体社会を樹立するのだ。それはとりもなおさず、唯一の戦争被爆国である日本が、世界平和運動でリーダーシップを発揮することを意味する。

日本型移民国家の最終目標は、世界の諸民族が和の心で平和を共有する人類共同体の創成である。しかるに、2017年1月現在の世界の移民をめぐる情勢を見ると、前述のとおり、米国、英国、フランス、ドイツで移民恐怖症と排外主義が猛威をふるっている。以下は、移民氷河期の到来と坂中移民政策論の関係についての所感である。

〈世紀の人道危機時代と遭遇し、移民1千万人構想と人類共同体思想は世界史的意義を有するものに飛躍する。それによって、これまで移民政策で世界に貢献してこなかった日本の名誉が回復する。そして、移民に新天地を提供し、移民に幸福を求める権利を保障し、世界的な人道危機に見舞われた移民に生きる勇気と希望を与える。〉

私の移民政策理論の進展を見守ってきた内外の友人たちは、移民国家の理想像の創作と、人類共同体・世界平和体制の確立を一体不可分のものと関係づける移民国家の理論を、坂中移民革命思想の到達点と評価する。

和を尊ぶ日本精神から生まれた移民国家の理念が世界文明の新地平をひらく夢を、私は持ち続ける。近未来のいつの日か、平和の心をはぐくむ日本の土壌で育った世界平和哲学が、世界の人々を和解に導く星としてきらめく時代が訪れると確信する。

人類共同体思想が世界に貢献する時が来た

私は2014年4月、南カルフォルニア大学日本宗教・文化研究センター主催の「日本の移民政策に関するシンポジウム」において基調講演を行った。

「Japan as a Nation for Immigrants : A Proposal for a Global Community of Humankind」のタイトルでスピーチした。私の熱い思いは世界の知識人に伝わったと思う。

主催者のダンカン・ウィリアムズ南カリフォルニア大学准教授は、「坂中さんの移民政策を世界に紹介する『小さな企画』です」といわれた。だが、私にとってそれは「人類共同体思想を世界に披露する『大きな企画』であった」と思っている。何よりも、日本語のスピーチ原稿「日本の移民国家ビジョン——人類共同体の創成に挑む」を格調高い英文にし

ていただいた。

そのとき、すばらしい英語に訳された人類共同体思想（人種・民族・宗教の違いを超えて人類が一つになる世界をめざす理念）が世界に羽ばたき、各国の移民政策にも影響が及ぶと予感した。

さて、ここにきて、移民政策に関する世界の空気が一変した。移民排斥主義と人種差別主義の擡頭である。移民問題は世界が緊急に解決を迫られる世界的課題になった。私の予想よりも早く人類共同体思想が世界に貢献する時が来た。

本年1月、トランプ米大統領が7か国からの移民の入国を一時的に禁止する大統領令を発し、自由の女神は風前の灯火になり、米国を始め世界中が大荒れである。しかし、移民鎖国を国是とし、移民政策で世界に貢献していない日本に、トランプ氏の強権発動を批判する資格はない。

だからといって、日本の首相と米国の大統領が移民排斥の考えで一致していると、国際社会から受け取られる事態は避けなければならない。それは日本の命取りになりかねない。日本の移民政策はトランプ大統領のそれとは違ふと、はっきり目に見える形で世界に示す必要がある。

大量の移民を最も必要とする日本が、今こそ人類共同体の理念を掲げて移民開国を宣言する時だ、と私は安倍首相に決断を迫った。この2月に緊急出版した『私家版 日本型移民国家が世界を変える』（改訂版）である。

日本が世界の人道危機を救う

西洋文明の没落は近いと予感する。それでは日本文明は西洋文明にとってかわる存在になれるのだろうか。

私は現代世界を比較文明論的立場から俯瞰し、普遍性に翳りが見られる西洋文明の終焉の日が近づき、これから世界は地殻変動の時代に入ると認識している。今後、人類の英知を結集し、新しい世界精神と世界秩序の形成を模索する動きが出てくるだろう。その場合、西洋とは異質の精神と文化がある日本文明こそ、新たなる世界文明の創造において、重要な役割を果たす必要があると考えている。

いま現在、西欧社会で人種差別と移民排斥の世論が高まっている。米国のトランプ大統領を先頭に排外主義者たちが声高々に「移民はノー」と叫ぶ異常な光景が見られる。民族間、宗教間の対立が先鋭化し、エスノセントリズムの考えが浸透し、歴史の歯車が狂ったとしかいいようがない。第三次世界大戦の勃発の危険をはらむ動きに発展しかねないと危惧する。日本にとってもこれは決して他人事ではない。

欧米社会が移民問題で混迷に陥った今こそ、安倍晋三首相が「人類共同体の理念の下に50年間で1000万人の移民を迎え入れる」と国際社会に約束する時だ。

日本が移民大国へ鮮やかに変わり、万人を懐に温かく迎える日本人の豊かな心を世界の

人々に示せば、日本は人道危機時代における移民・難民の希望の星になる。移民と難民に開かれた人道大国の日本イメージがまたたくまに世界に広がる。21世紀初頭の日本が世界の一大危機を救ったと世界史の教科書に特記されるだろう。

人類共同体思想に世界のメディアが関心を示している。2016年の晩秋、トランプ氏の米国の建国精神を覆す移民政策に強い危機感を持つワシントン・ポスト、ニューヨークタイムズの取材を受けた。両紙の記者は、人類共同体思想が根本にある日本型移民政策の世界的意義をよく理解していた。私は責任の重さに身の引き締まる思いがした。

伝統的移民国家の轍を踏んではならない

日本の移民国家のアイディアは西洋のものまねではない。日本の土壌が生み出した日本独特のものである。

移民先進国の外国人処遇の歴史を概観すると、決して道理にかなったものばかりだったというわけではない。人種差別意識とイスラム教徒に対する恐怖心が国民の心にきざまれている欧米諸国では移民の同化はあまり進んでいないようだ。それどころか、前述したとおり、反移民を主張する排外主義が勢力を強めている。高度文明を誇る欧米社会で起きている移民排斥運動に驚きを禁じ得ない。

わたしは、日本は既存の移民国家の轍を踏んではならないと肝に銘じ、日本独自の移民国家の理念を打ち立てた。「万人は平等」と「人類は一つ」の日本思想を移民国家の理念に体現し、全人類が和の心で結ばれる共同体社会の形成を日本の国家目標にすえる。懐が深い日本型移民国家思想は世界最高レベルの移民国家の理論に発展する可能性を秘めている。

人種、民族、宗教を問わず、すべての人類に開かれた日本の移民革命思想は、白人至上主義とキリスト教という一神教の考えが根本にある西洋精神の対極をなすものだ。人間・動物・植物のあらゆるものに神の存在を認める日本人の汎神論的世界観がその根底にある。日本では神道と仏教が平和共存（神仏習合）している。そして、日本人の心の奥には文明社会では極めてユニークな宗教心、すなわち自然界に存在する万物を崇拝するアニミズム（精霊信仰）の世界がある。動植物の仏心を描いた江戸時代の画家・伊藤若冲の絵をこよなく愛する民族である。

人種・民族・宗教に対する偏見が西洋人と比較して非常に少ない日本人は、世界の誰よりも人類共同体社会をつくる可能性のある民族である。さらに、様々な民族の心を一つにする同化力の強い日本社会の特色に照らすと、日本が地球時代の移民政策に新風を吹き込み、世界の移民国家のモデル国になるのも夢ではない。

人類共同体思想と排外主義思想

日本の移民政策の特色は何か。人類が一つになる地球共同体の夢を追い求める点にある。

最終目標は諸民族間の和解と恒久的な世界平和の実現である。高大な理想を掲げる坂中構想は世界の識者に衝撃を与えたようだ。

2014年4月、南カリフォルニア大学日本宗教・文化研究センター主催の「日本の移民政策に関するシンポジウム」における基調講演で日本人の抱く夢と抱負を語った。

〈日本の移民政策は、人口危機に瀕した日本を再生させる国家政策にとどまらない。地球上の諸民族が和の心で平和共存する世界を希求する世界政策でもある。日本の移民革命思想は、日本のみならず世界各国に根本的変革を迫り、すべての民族の共存共栄と世界平和に貢献し、国境を越えて人類の一体化が進むグローバル時代に生きる地球人への最高の贈物になるだろう。〉

それはまだユートピア物語の段階にある。だが、時代精神が混迷の度を深める今、世界平和思想と一体不可分の関係にある人類共同体思想を発表したのはタイムリーであった。西洋人には白人優越主義とキリスト教という一神教の宗教心が精神の根本にある。それこそが、現代の西欧諸国で露わになった移民に対する偏見と差別を生む根源である。

今日、欧米社会で広がる人種差別、移民拒絶、排外主義の世論を鎮静化させることが喫緊の世界的課題になった。フランス革命以後、世界文明を主導してきた西洋文明の限界が露呈する中、それに代わるものとして、日本文明の申し子である人類共同体思想が世界文明の精神の一翼を担う必要があると考えている。

その場合、人種・民族・宗教に甲乙はないと考える坂中理論に普遍性と正義があるので、人類共同体思想が排外主義思想を圧倒するのは論をまたない。もしかすると、人類共同体の理念が世界の移民政策の基本原則と認められる時代が早まり、今世紀前半にそれが訪れるかもしれない。

日本人が先導して近未来の新世界秩序を創る

人類は「戦争のない世界」を創れるのだろうか。日本人なら、努力すれば、それを実現できるかもしれない。

民族や宗教の異なる人と人との平和共存の前途は陰しい。世界史を概観すると、異なる民族間の戦争の歴史であった。文明が進んだ21世紀の世界でも、人類の本性というべき民族と宗教の問題が主因の戦争・内乱・テロが絶えない。縄張り争いと、子孫を残すための生存闘争も、動物の本能として人間の心に残っている。

地球上で戦争が絶えない根本原因は、ひとつの種から分化した諸民族が文化と宗教の優劣を競って戦争を繰り返すことにある。民族と宗教に内在する絶対主義的優越感と排他的性格を正さないかぎり、恒久的世界平和の夢は永久に実現しない。たとえば、かつて「人種のるつぼ」と称された米国では、白人至上主義者と黒人至上主義者の「殺し合い」が激しくなる一方だ。今や、世界の若者が憧れた移民国家の象徴は見る影もない。

世界中のすべての人がそれは夢のまた夢と考えていると想像するが、以下に述べるよう

に、日本人が先導して地球共同体世界を創る可能性があるという私の信念は揺るがない。

〈異なる民族と宗教に対する精神的な許容量が大きい日本人は、人類社会がかかえる民族対立と宗教対立の問題を超越する立場にある。地球上に存在するあらゆるものに神がやどると考える日本人は、すべての民族・宗教と公平無私につきあう稀有の民族である。さらに言えば、世界各地で燃え上がる民族感情と宗教感情を和平の心でしずめ、民族問題と宗教問題を平和的に解決する潜在能力が日本人のDNAとしてインプットされている。それは全人類の和解につながる世界平和思想である。地球上に存在するすべての人種・民族・宗教はひとしく平等であると考えた日本人は、近未来には、他の民族の及ばぬ境地に達し、戦争のない世界を創るという人類史的使命を帯びる立場になっていると予言する。〉